

上原 美術館 通信

2019
winter

No.

5

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2019年3月29日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



太古の昔、はるか南方海上の火山島群であったという伊豆半島。火山島群は地球の地殻の動きによって北上、今からおよそ60万年前に本州と衝突し、半島になったといわれています。その後も大小多くの火山が噴火しましたが、噴出する溶岩や火山灰によって伊豆の土台が形作られ、その大地を大小の河川が刻み、土砂を堆積して作り上げたのが現在の伊豆半島です。海、滝、断崖、盆地、平野、そして温泉。地球の営みが生み出した多様な伊豆の景観は、地域ごとに異なる人々の生活を生み、独自の歴史を紡ぎ出してきました。現在伊豆には7つの市と6つの町がありますが、それらの市町は多様な顔を持ち、そこに伝えられてきた仏像もやはり個性的なのです。本展では伊豆の13市町から一点ずつ(阿弥陀三尊などは一組で一点と数えました)仏像を選び、展示します。仏像の年代は平安時代から江戸時代まで幅広く、大きさも十数cmの小像から等身大の仏像までと様々ですが、それぞれが各地域の歴史を伝える、個性的で魅力的な仏像です。

企画展最初の部屋でお客様をお迎えするのが、伊豆の玄関口、熱海市泉地区の保善院に伝えられた地藏菩薩半跏像(熱海市指定文化財)。背面に上野国(現在の群馬県)岩田郷の住人・乙部氏の名と貞和5(1349)年の年が刻まれているが、なぜ遠く離れた北関東の人名が伊豆の仏像に刻まれているのか、乙部氏によってこの地(例えば熱海の走湯山[現在の伊豆山]は全国的に知られた霊場でした)に奉納されたものなのか、それとも小像ゆえ、仏像が移動してきたのかなど、伝来は不明です。片足を踏み下げた姿の座高13.2cmの小像ですが、今から670年前、南北朝時代に作られた貴重な仏像。通常公開されていないお像ですが、特別にご出展いただきました。

伊豆東海岸の伊東市からは、川奈地区の恵鏡院に伝えられた天部像が展示されます。像高41.2cm、両手首先と両足先を除く像のほとんどを、ヒノキの一枚材からつくる一木造の立像。穏やかな面貌と頭上に髻を結び上げる姿は観音を思わせますが、上半身に衣を重ね着するのは梵天や帝釈天など天部の特徴です。金色に輝く姿から一見新しい像に見えますが、穏やかな造形から平安時代後期の像と考えられます。伊東市宇佐美・円応寺阿弥陀如来坐像と並び、伊東市内最古の貴重な仏像。本像も通常は公開されていない仏像です。



《観音菩薩坐像》鎌倉後期-南北朝時代 伊豆の国市・北條寺蔵 静岡県指定文化財 撮影：田畑みなお

伊豆の国市南江間・北條寺の観音菩薩像(静岡県指定文化財)は実はこのお寺のご本尊。[写真]今回、ご住職の特別なご厚意で展示が実現しました。左足を踏み下げたくつろいだ姿と、垂下して台座を覆う衣の襞が生むリズムカルな造形が印象的な像で、どこか異国的な雰囲気をもっています。大陸の文化を積極的に取り入れた鎌倉時代、中国・宋の仏像の影響を受けて作られた美しい仏像です。

伊豆市の修禅寺の観音菩薩像は、もと修禅寺保育園の「ご本尊」だったという異色の経歴の持ち主。少し大きめの顔が印象的ですが、構造も独特で、南北朝時代、院派仏師が作った仏像と考えられます。伊豆では従来、慶派仏師の活躍が知られていますが、近年の当館の調査で院派仏師の作例もいくつか見出されています。本像はそのうちの代表的な作例です。

伊豆各地から本展に集まる仏像。そのうちの一部をご紹介します。(田島)

画家たちは旅をして、まだ見ぬ風景や人々と出会い、新しい絵画を生み出してきました。本展では梅原龍三郎、牛島憲之から印象派の画家たちまで、旅からインスピレーションを得た絵画の数々をご紹介します。

旅のはじまりにご紹介するのは、牛島憲之の作品です。《夕月富士》は2018年度、新たに収蔵した作品の一つで、当館では初公開となります(p.5コラム参照)。山中湖の夕暮の富士を描いたこの作品は、牛島が87歳のときに描いたもの。牛島は歳を取るほど豊かな芸術を生み出しましたが、人生の旅路の後半に近づきつつも、これほど美しい風景画を描き出すその力に圧倒されます。

牛島は伊豆・下田に別荘を構え、度々この地を訪れています。82歳のときに描いた《雨明かる》(1982年)は下田の白浜・板戸海岸で描いた風景で、柔らかに光る雨上がりの海面を見事に捉えています。本展では下田周辺を描いたスケッチブックも展示する予定です。画家が旅先で目にした新鮮な風景をお楽しみいただければと思います。

さらに伊豆の旅を捉えた作品が伊東深水の木版画「伊豆八景」、こちらも本年度の新収蔵品です(p.5コラム参照)。美人画家として有名な深水には珍しい写実的な風景版画の連作であり、表現の幅広さを感じさせます。本展では下田市白浜や西伊豆町田子のほか、吉田、日野を描いた5点を紹介します。

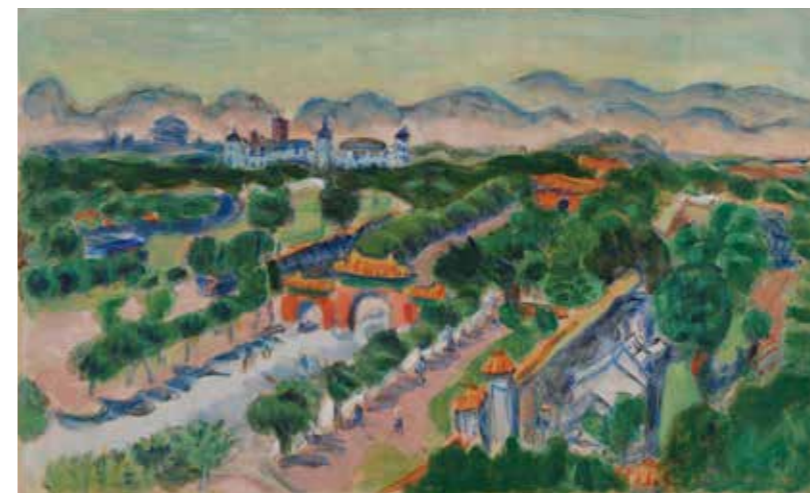
梅原龍三郎は1939(昭和14)年に北京を訪ね、その美しさに魅了されました。日記には「四方の眺め美しく誠に夢の國なり」、「北京の四十二日夢の如し」と記されており、後に「これ

までの人生の中でも一番張りのある時であったと思っている」というほど、そこでの制作は充実していました。戦後、大きく改変された北京の街並みですが、緑豊かな《北京長安街》(1939年)の風景を見ると、旅先で出会った画家の新鮮な感動が甦るようです。

また、ヨーロッパは画家たちの憧れの地でもありました。20歳で渡欧した安井曾太郎ははじめピサロやミレーなどに学びながら、次第にセザンヌへと傾倒し、「何を見てもセザンヌのやうに見えるので困りました」と後に述べるほど大きな影響を受けました。そのようすは安井が滞欧期に描いたスケッチブック(1908-11年)や、《小高き丘》(1913年)にも見るすることができます。

そのほか、第2展示室では、フランスの画家たちの旅に焦点をあてます。《アルジャントゥイユの橋》(1873年)はルノワールが32歳で描いた作品です。当時、友人の画家モネは、パリから鉄道で約20分のアルジャントゥイユに暮らしていました。ルノワールは度々ここを訪ねて、ともに制作を重ねます。この絵に描かれた鉄道は1851年に完成したばかり、当時アルジャントゥイユは日帰りのレジャー地として人気を集めていました。煙を吐きながら鉄橋を渡る機関車には、当時の旅の様子が垣間見えます。関連資料として、19世紀後半のガイドブックも展示します。ここには時刻表などが掲載され、当時の画家が体験した旅をイメージできるのではないかと思います。

展示室を巡りながら画家たちが体験した旅の感動をお楽しみいただけましたら幸いです。(土森)



梅原龍三郎《北京長安街》1939(昭和14)年



安井曾太郎《小高き丘》1913(大正2)年

像高36.8cm。甲冑で身を固め、両足を開いて立つ像。右手に槍と思われる柄の長い武器、左手は腰に差した刀を今まさに抜き放つかのように構え、正面を見据えています。一見、毘沙門天か四天王の一体かと思いますが、仏教の天部は基本的には小札(皮または鉄製の短冊形の板)を綴り合せた鎧を着ることはなく、腰に日本刀を差すことも、草履を履くこともごく稀な例外はあるものの普通はありません。本像は日本の武者像と考えられます。造像年代は江戸時代でしょう。

本像はかつて東伊豆町奈良本(北川)の瑞雲院という寺に伝えられていました。寛政12(1800)年に成立した伊豆の地誌『豆州志稿』の廃瑞雲院の条によると、「甲冑を着したる木像あり。腹籠の木簡に野崎牛助家次と書す。是れけだし大坂城の脱兵ならむ。今子孫存す」とあり、この「木像」が本像と考えられます。「大坂城の脱兵」とは、徳川家康によって豊臣家が滅ぼされた大坂の陣(1614~15)の落武者のことでしょう。

本像が伝えられた瑞雲院は『豆州志稿』が編纂された18世紀末にはすでに廃寺同然だったようですが、かろうじて残っていた本堂も2012年に取り壊され、現在本像は、野崎牛助の子孫の野崎家に伝えられています。ご子孫にお話を伺ったところ、意外な伝承を聞くことができました。本像を伝えた瑞雲院は牛助が自分の持ち山の半分を寄進して開いた寺だということです。さらに本像を納める厨子を調査したところ、各所に墨書が発見されました。この墨書は、「維時明治二十年五月彩色并二頭子再建」とある部分から、本像を明治20年(1887年)に修理した際に記したものと判明。明治20年当時の本像に関して

知られていた伝承を知ることのできる貴重な史料です。

さて墨書から本像は「瑞雲院殿実相覚了大禅定門 野崎先祖俗名牛助名乗家次」の像であることが分かりました。前半は戒名で名前は「野崎牛助家次」です。注目したいのは「院殿」という戒名で、将軍や大名のほか、寺や堂を建立した人物につく高位の戒名ですから、彼が寺を開いたという伝承を裏付けてくれます。さらに厨子底面にも「発願開基」とありました。こうしてみると、『豆州志稿』の牛助を「大坂城の脱兵」とする説が怪しくなります。広い所有地を寄進して寺の開基となった人物が落武者であったとは考えにくいでしょう。

一方、「天正十八年四月初七日」とも記されていましたが、これは恐らく牛助が落命した時期を記すものと考えられます。もしそうであるなら、牛助は大坂の陣の20年以上前に没していることになり、彼を大坂の陣の落武者とする説はやはり怪しいようです。ところで、天正18(1590)年の4月といえば、伊豆では大事件が起こっていました。天下統一を目指す豊臣軍が、小田原を拠点とする北条氏(後北条氏)を滅ぼすべく、北条水軍の要衝であった下田城を攻撃していたのです。下田城を守る小田原方の将兵はおよそ600人、攻める豊臣方は1万を超え、下田城は50日間の籠城戦の末、秀吉軍から出された

「投降した将兵の罪を赦免する」との条件を飲み、開城したといわれています。

残念ながら野崎牛助家次の名は後北条氏の文書には見えず、彼の死が戦死であったという証拠もありません。しかし、戦国時代の伊豆が後北条氏の領国であり、北川の実力者であったと思われる彼も後北条氏の配下にあった可能性が高いこと、その彼がこの時期に死に、その像がほかでもない鎧兜に身を固めた姿であらわされたことなどから、牛助が豊臣軍と戦った北条水軍の武将であったのではと思われてなりません。

本像は個人のお宅にある像であるため通常非公開ですが、4月6日から6月30日の会期で当館が開催する「伊豆半島仏像めぐり」に展示されます。この機会に是非ご覧ください。



《野崎牛助家次像》江戸時代 東伊豆町 個人蔵

2018年度、上原コレクションに仏像1体、仏画一幅のほか、近代絵画4点、版画1組が新たに仲間入りしました。今回はこれらのうち近代絵画をご紹介します。

一 日本近代洋画

はじめにご紹介するのが牛島憲之《夕月富士》(1985年)、牛島が87歳のときに描いた作品です。山中湖から富士を望む夕空には三日月がうっすらと輝いています。湖面には一艘の船が横切り、自然の営みの中で生きる人々の気配を感じさせます。

画家自身、この作品について次のように述べています。「若い頃は、富士山だけは描くまいと思っていました。あまりにもたくさんの画家が描いていますし、もうこれ以上私の富士山など必要ないと決めていました。ところが伊豆にある家への行き帰りに、見ていると、その時々で、富士は実に美しい姿を見せる。その美しさがだんだんと私の心の中に蓄積されていき、あるとき突然限界点に達したのでしょうか、急に描きたくなったのです。私には私の富士があるはずだ、と。八五の時でした。それ以来、



牛島憲之《夕月富士》1987年

いくつも描きました」(『日経ポケットギャラリー 牛島憲之』1993年)。

コップに1滴ずつ水が溜まるように、牛島の心に富士が満たされたのが85歳のとき。その2年後に描かれた本作には瑞々しい感性で捉える画家の豊かな内面を感じさせます。伊豆への道中からの眺めから生まれた牛島の富士が、上原コレクションの仲間入りしたのは何か縁を感じます。本作は、82歳のときに伊豆・下田を描いた《雨明かる》(1982年)とともに次回『画家たちの旅』展に出品されますので、合わせてお楽しみいただければと思います。

一 日本画

伊東深水の版画連作「伊豆八景」シリーズも、伊豆にゆかりのある新収蔵品です。今回新たに収蔵したのは、八景のうち「午後の白浜」「早春の吉田」「炭焼く日野」「田子の夜雨」「白浜の残照」です。美人画を得意とする伊東深水の新たな一面が見られるこの風景版画も『画家たちの旅』展に出品します。

鎗木清方の素晴らしい作品も新たに2点収蔵しました。《十一月の雨》(1955年)は活気ある明治時代の街並みが

描かれています。傘を差す女性の傍らには雨に打たれた花売りが台車を引き、街の活気に溢れています。焼き芋屋からの煙は雨が落ちる路地に広がり、秋雨のにおいさえ感じさせるようです。

もう一点は、清方の「卓上芸術」を代表する《築地川》(1941年)。清方が幼い頃に暮らした京橋周辺の情景が10図の折帖にまとめられています。今は殆どが首都高速道路となった築地川の周辺は、当時江戸の風情が残り、人々の活気に溢れていました。折帖の最後には幼い画家自身の絵が描かれており、清方のこの作品への思い入れを知ることができます。

一 西洋絵画

詩情あふれる風景画を多く描いたアルベール・マルケの作品も1点新たに収蔵しました。マルケは1912年5月から3ヶ月間、北フランスのルーアンに滞在、秋にも再びこの地を訪れて制作をしました。灰色がかかった空に立ち上る船や街並みの煙がマルケらしく、25号の大きさも迫力があります。この作品は第IV期の展覧会『上原コレクション名品選』に出品予定です。

新しい上原コレクションとの出会いにどうぞご期待ください。



アルベール・マルケ《ルーアンのセーヌ川》1912年

仏教館・近代館 これからのイベント

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会について、学芸員が展示室にて解説を行います。

日時 会期中の毎月第3土曜日 11:00～/14:00～(仏教館・近代館、約30分ずつ)

会場 上原美術館 仏教館・近代館 ※要入館券 当日、仏教館にお集まりください

学芸員によるレクチャー(ミニ講座)

開催中の特別展『伊豆半島仏像めぐり』の企画担当学芸員が映像を交えながら、展覧会の見どころをお話します。

演題 伊豆半島仏像めぐり 講師 田島整(当館主任学芸員)

日時 4月22日(月)、5月26日(日)、6月2日(日)13:30～15:30

※各回とも同じ内容になります

会場 近代館 会議室 定員 30名 ※先着順、要予約・要入館券

予約方法 ①お名前 ②ご住所 ③お電話番号 ④参加人数(2名様まで) ⑤参加希望日を明記の上、郵便はがき、もしくはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にてお申込みください。



活動報告

出張授業

2019年1月16日、31日 西伊豆町立賀茂小学校 1年生～6年生

2019年1月10日、17日 富士見中学校(東京練馬区) 2年生

賀茂小学校では、全学年を対象に当館の絵画コレクションが掲載されたアートカードを使ったゲームなど、美術鑑賞授業を行いました。

富士見中学校では京都・奈良方面へ修学旅行に行く生徒を対象に、出張授業を行いました。京都・奈良で出あえる仏像や歴史を紹介しました。

授業入館

2019年1月25日 下田市立下田認定こども園、1月28日 下田市立稲生沢中学校 2年生、2月1日 下田市立下田東中学校 2年生

下田認定こども園の授業入館では、園児たちの質問に学芸員が答えながら、見学しました。京都・奈良方面へ行く中学校の生徒は、仏像の中から如来の見分け方を、仏像ギャラリーの仏像を見ながら学びました。

調査活動

2018年10月29日、11月26日、12月6日、2019年1月22日 河津町内の寺院調査

河津町町史編纂委員会からの依頼で、河津町内の寺院悉皆調査を行っています。現在まで5ヶ寺の寺院を調査し、中には南北朝時代の銘文を持つ仏像が発見されました。河津町の中世から戦国期を知る手掛かりともなる貴重な作例となります。今後も継続して調査協力を行ってまいります。

講演・文化財保護への助言

田島主任学芸員は引き続き、河津町町史編纂委員会、富士市文化財保護審議会へ出席し、町史編纂事業や文化財保護への助言を行いました。また10月に下田市教育委員会主催の下田市史講座、11月には伊東市教育委員会主催の伊東市史講座で、各自自治体の仏像について講演を行いました。

土森主任学芸員は、11月に東伊豆町教育委員会主催の生涯学習講座講演、河津町バガテル公園の映画『あるアトリエの100年』の上映会で、画家・岡田三郎助に関する講演を行いました。



冬のワークショップ

多くの方に美術と触れる楽しみを知っていただくことを目的として、今年の冬もワークショップを開催しました。大人向けの体験イベントのほか、今回は初めて親子で楽しむ水彩画のイベントも実施しました。

◎おとなの日本画体験 2019年1月19日 〈参加者16名〉

当館日本画教室講師の日本画家・牧野伸英先生を講師としてお招きし、日本画の制作体験を行いました。一色ずつ岩絵具と膠液(定着剤)を絵皿で溶き、小さな色紙(寸松庵色紙)に作品を描きました。参加された皆さんには、岩絵具の質感や日本画特有の美しい色彩を楽しんでいただきました。

◎おとなのデッサン・ワークショップ 2019年1月25日～26日 〈参加者10名〉

当館デッサン・水彩画教室講師の小野憲一先生による鉛筆デッサン・ワークショップを開催しました。今回は2日間にわたって、紙コップを題材にものの捉え方を学びました。ワークショップを通して、参加者は鉛筆の持ち方や、かたちの取り方など、デッサンの基礎を知る貴重な機会となりました。

◎親子で色あそび—透明水彩で 2019年2月9日 〈参加者18名〉

講師に小野憲一先生をお招きし、親子で一緒に制作する色あそびのワークショップを開催しました。現代美術作家としてご活躍の小野先生は、繊細な色彩表現による絵画を制作されています。今回は発色が美しい透明水彩絵具を混色して、さまざまな色を作る体験からはじまりました。多彩な色を用いてにじませたり、ぼかしたりしながら、最後に親子で一つの作品を協力しながら制作しました。

今回の冬のワークショップは、先着順で定員に達した後もご参加の希望が多くございました。たくさんの方にご応募いただき、深く感謝申し上げます。今後も、当館ではワークショップなど各種イベントを開催する予定です。皆様のご参加をこころよりお待ちしております。

*上原美術館で開催されるイベント情報は、当館ホームページでご案内いたします。



2019年度の展覧会予定

1期 2019年4月6日(土)～6月30日(日)

※4月1日～4月5日は全館休館

静岡デスティネーション・キャンペーン記念

仏教館

伊豆半島仏像めぐり — 伊豆13市町の仏たち —

伊豆半島13市町から特色ある仏像を紹介する展覧会です。

近代館

画家たちの旅

— 梅原龍三郎、牛島憲之、ルノワールが見た風景 —

画家たちが旅からインスピレーションを得た絵画の数々を展示します。

2期 2019年7月6日(土)～10月6日(日)

※7月1日～7月5日は全館休館

両館

上原コレクション名品選Ⅰ

昨年、当館で新収蔵した薬師如来坐像にスポットを当てるほか、仏教美術、近代絵画コレクションから選りすぐりをご覧ください。

3期 2019年10月12日(土)～2020年1月13日(月・祝)

※10月7日～10月11日、11月25日・26日は全館休館

伊豆市共同企画

両館

伊豆をめぐる名画

— 横山大観、安田靫彦を中心に — (仮)

修善寺温泉のある伊豆市が所蔵するコレクションとともに伊豆を訪れた画家たちの足跡をたどります。

4期 2020年1月18日(土)～4月12日(日)

※1月14日～1月17日は全館休館

両館

上原コレクション名品選Ⅱ

新収蔵となるアルペール・マルケ《ルーアンのセーヌ川》や上原コレクションの見どころを紹介します。

伊豆だより



2019年4月～6月は静岡デスティネーション・キャンペーンが開催されます。この期間は県内各地で観光イベントが開催されます。その一つとして、下田の蓮台寺温泉では、3月下旬頃から美しいだれ桃を楽しむだれ桃祭りが開催されます。これにあわせて、4月1日～8日に蓮台寺区で管理している大日如来坐像(重要文化財)の公開があります。当館の展覧会もこのキャンペーンを記念して、伊豆の仏教美術や歴史の再発見と、旅から感じる地域の魅力をお伝えできたらと企画しました。これから新緑が美しくなり、賑わいをみせる伊豆へ旅に出かけてみませんか。

(櫻井)

おすすめの雑誌



雑誌『目の眼』(隔月連載コラム)

骨董・古美術の魅力やコレクションの楽しみをテーマにした月刊誌『目の眼』では、上原コレクションを紹介するコラム「コレクターのまなざし」を隔月連載しております。7回目となる4月号(3月15日発売)のコラムは、牛島憲之の油彩画《雨明かる》です。牛島82歳のときに描いたこの風景画は伊豆・下田の白浜にある板戸海岸がモチーフとなっています。この絵が上原コレクションに収められた経緯とともに、牛島芸術の魅力をご紹介します。雑誌『目の眼』は一般の書店でも販売されております。《雨明かる》は次回展覧会『画家たちの旅』(p.3参照)にも出品されますので、合わせてご覧いただければと思います。

(土森)

おすすめの展示館



伊豆には鎌倉時代に造られた優れた仏像がいくつも遺されていますが、その一つ、慶派仏師じっけいの実慶が造った阿弥陀三尊像(重要文化財)を公開しているのが、伊豆北部に位置する函南町桑原にある「かなみ仏の里美術館」(毎週火曜と年末年始休館、大人300円)です。もとは桑原地区の薬師堂にたくさんの仏像が安置されていましたが、2012年にこれらの仏像を収蔵し、公開する施設として誕生しました。

外光を取り入れた受付エリアを過ぎると、仏像の特徴や形、歴史をパネルで紹介し、学べる部屋があり、いろいろと仏像について知ることができます。奥の展示室には薬師堂に伝わってきた仏像群が展示されており、ゆっくり仏像と対峙したい方におすすめです。

(櫻井)

次回休館日は2019年4月1日(月)～4月5日(金)です(展示替えのため)

 **上原美術館**
Uehara Museum of Art

開館時間
9:00～17:00
最終入館は16:30まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引

表紙写真：下田市立下田認定こども園の園児たちの授業入館の様子